

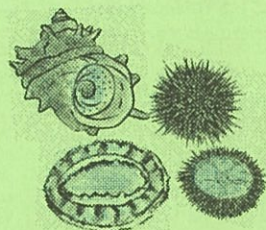
おちかこうみんかんだより

第179号 令和3年6月7日発行

梅雨入りし、ジメジメした日が続いていますね。

今年も5月12日～5月14日（1汐目）、5月26日～5月28日（2汐目）に磯があり、6月10日～6月12日（3汐目）と続きます。年々磯焼けに伴うアワビやサザエ、ウニなどの減少が深刻になっているそうですが、今年の収穫はどうだったのでしょうか？
たくさん収穫できた方も、そうではない方も3汐目に期待したいですね♪

新型コロナ感染症に対するワクチン接種も始まっていますが、季節の変わり目で疲れが出やすい時期なので体調を崩さないように過ごしましょう。



よみち塾がスタートしました！

4月26日（月）から、令和3年度の放課後子ども教室「よみち塾」が始まりました。以前は福祉事務所からおちか新聞へ寄稿していましたが、今年度から教育委員会所管となりましたので、本紙の中で「よみち塾」の活動紹介をしていきます。よろしくお祈りします。

さて、初日は、参加した子ども達数名に「よみち塾の3つの約束」をポスターにしてもらいました。（右写真）
5月までの活動の様子を紹介します。



↑長縄で遊んでいます↑



↓アドバイザーとオセロを楽しみました！



↑折り紙の日に作った万華鏡↑



↓宿題も頑張っています↓

おちか山学校

～大阪のおいしいちゃんおばあちゃんのために 絵を描こう！！～

5月22日（土）に第1回目の山学校企画を実施しました。
今回は、「つながる、ぬり絵展」

～知らない誰かに絵を描いて、知らない誰かが色を塗る～
という大阪の高齢者施設と小値賀町などの子ども達を繋ぐ企画とコラボして実施しました。

当日は簡単なゲームをしてから、小値賀ならではのキャラクターちかまるくんや色々な植物・乗り物の本、イラスト集などを参考に自由な絵を描きました。約2時間、皆さんよく集中して描き続け、64枚ものぬり絵の下絵が完成しました！

完成した下絵は大阪の高齢者施設で色を塗られ、全国で1番長い大阪の商店街に展示されるそうです。



～図書館からのご案内～

図書館の「本」の宅配サービス！

小値賀町立図書館では、「本を読みたいけれど様々な事情で図書館まで行けない。」という方に、読書を楽しむことができるよう「本」の宅配サービスを行っています。
離島地区（大島、納島、六島）の方もぜひご利用ください！ 町営船に預ける所までは、図書館が行います。

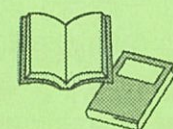
詳しくは、図書館（☎56-2711）までお問い合わせください。



宅配サービスのご利用方法

- ◆電話で、読みたい本をご連絡ください。
- ◆受付後、職員が配達いたします。
- ◆貸出期間は、13日間です。
- ◆貸出冊数は、1人、本：10冊、CD：1枚 までです。
- ◆以前借りた本は、このとき返却できます。
- ◆利用は無料です。
- ◆図書館の休館日の利用はできません。
（月曜日、最終金曜日、年末年始、臨時休館日 など）

※電話連絡後、すぐに（当日中に）お届けすることができない場合もあります。



CDや雑誌も
貸出ししています！



遊遊句抄

5月【兼題】若葉（わかば）、初鯉（はつがっお）、自由題

若葉風誘われ登る十五段	若葉雨誘われ登る十五段	黄昏にふたつの空の夏の暮	夏めくや車窓の町はトラムたび	二人居た道に音なく若葉雨	まだ逢えぬ児に想い込め鯉のぼり	初鯉漁船帰るが市場こす	母の日や最後帰宅の母の吟	迫り上がる若葉織りなす今朝の景	里若葉包まれやさし野の仏	午後三時二人の日々はお茶と薔薇	物干しの服のダンスや若葉風	幹の黒ひきたて茂る若葉かな	明け放つ庭の大樹の若葉風	驚に身を震し来留む若葉雨	庵成す谷若葉置き彼逝けり
若葉雨禅僧に習う早寝法	若葉雨誘われ登る十五段	黄昏にふたつの空の夏の暮	夏めくや車窓の町はトラムたび	二人居た道に音なく若葉雨	まだ逢えぬ児に想い込め鯉のぼり	初鯉漁船帰るが市場こす	母の日や最後帰宅の母の吟	迫り上がる若葉織りなす今朝の景	里若葉包まれやさし野の仏	午後三時二人の日々はお茶と薔薇	物干しの服のダンスや若葉風	幹の黒ひきたて茂る若葉かな	明け放つ庭の大樹の若葉風	驚に身を震し来留む若葉雨	庵成す谷若葉置き彼逝けり
百笑	増円	小梅	利石	一穂	月歩	値賀助	虫砂男	紫紅	香松	松月					

Vol.06 中村地区（中村地区ぶらり旅のまとめ）

ここまで散策してきた中村地区についてのまとめです。実は「ぶらり旅」の初回を中村地区に決めたのには理由がありました。Vol.01に書いたように、年末年始の喧騒を避けたのも一つの理由ですが、何よりも、中村地区在住の60～70歳代の方々がよくおっしゃられる「中村はな～んもなかむら（無か村）。」という言葉が長らく気になっていたためです。皆さん、明るくおっしゃるのですが、背景には先人たちが紡いできた古い伝統や風習を継承することができずに、自分たちの代で失ってしまったという、自責の念があるように思えてなりません。歴史深い小値賀のなかで、本当になんも無か村などが存在するのだろうか。これはひとつ自分の足と目で確かめてみよう。」この思いから、中村地区をスタート地点に決めたのです。

実際に歩きだしてみると、次々と中村のお宝に遭遇。優しいお顔の「馬頭観音」。何百年間という長きに渡り、地域の方々に大切に守られてきた「一念寺」。15世紀末から16世紀初頭に製作された高貴な女性？の魂を祀った「くよう様」。婦人病を治すとされる「弓田御前様」。島内で唯一の学問の神様「天満神社」。ここでは悪霊と鳥居に関する興味深いお話を伺うことができました。そして何よりも、約700年も大昔に人と牛の手で行われた大干拓の歴史を伝える、「牛の塔」。旅が進むにつれて「無か村どころか、有りまくり村やないかいっ！」と次々と出会うお宝に突っ込みを入れる始末。次なる地へと向かう足取りもどんどんと軽くなりました。このほかに、今回は立ち寄ることができませんでしたが、五島列島で最古級の山城「膳所城」（11世紀末築城か。）や「歯痛み止めの石碑」と呼ばれ、近世期の製作と思われる供養碑など、中村地区にはまだまだ貴重な歴史資産が残されています。

中村地区を歩いてみて特に感じたことは中世・近世期という時期の物証が色濃く残っている点、さらに「くよう様」や「弓田御前様」、「歯痛み止めの石碑」など、在地有力者の存在を示すものが多くある点です。小値賀が2つの島に分かれていた頃の中村地区は海峡を隔てた東の島に対峙する西の島側の防衛の要衝地として機能していたと思われます。また、約700年前に埋め立て工事が完了し、1つの島となった後は小値賀島内各地を繋ぐ多くの道が交わる交通の要衝地としての機能を有することとなりました。それぞれ性格は異なりますが、この要衝地であったことが影響して在地有力者の発生を見たのでしょうか。この点は他の地域にはみられない中村地区独自の特徴といえます。「なんも無か村」から「小値賀の真ん中村」へ！

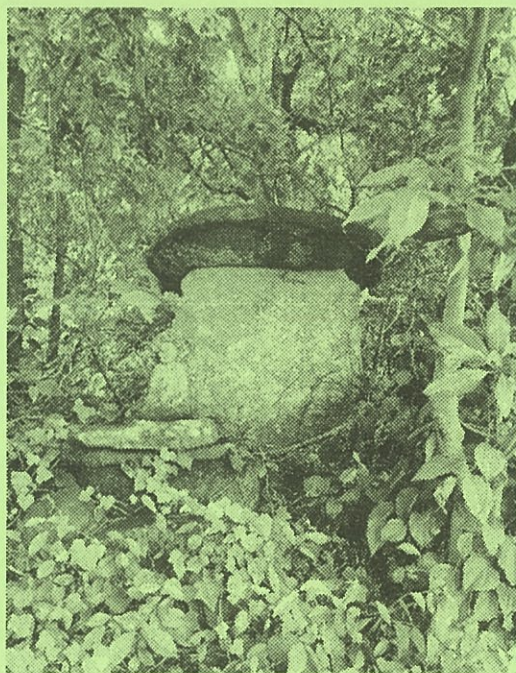
本コラムが改称へのきっかけとなることを願いつつ、次の地を目指します！（文：平田 賢明）



膳所城と建武新田
写真中央の円形の森が膳所城
写真向かって左手一体に広がる水田が建武新田
(約700年前の埋め立て地)



歯痛み止めの石碑(遠景)
植松墓地へと続く二差路分岐点の小さな林の中に
歯痛み止めの石碑はある



歯痛み止めの石碑(近景)
姿かたちは「くよう様」にそっくりである
板碑上面には阿弥陀如来を意味する梵字が見え
ることから阿弥陀三尊仏板碑の可能性もある

（プロローグ）

子牛一頭100万円、本当！夢のような価格です。現在、小値賀牛は高値で取引されて、肥育農家からもおとなしく、飼いやすいと高い評価を受けています。しかし、昭和40年代頃は10万円もすれば良い方で、その当時の畜産農家の苦労は大変なものでした。そのような状況の中でも、小値賀牛の目指すべき方向を見出し、和牛改良に畜産農家一丸となり取り組んできました。和牛の改良と畜産経営とは相反するものと伺っています。しかし、今は安くとも、小値賀牛の特色を生かし、欠点を補って新たな小値賀特有の和牛を造成しようと誰もが心血を注ぎました。今日、高く評価されているのも、これまでの努力があってこそだと思います。因みに、高く評価される子牛は、発育がよく、肉質が上級になると見込まれる系統（父、母牛等の種牛）で、飼養管理が良いものである。

（目標に向かって）

郷土史では、そもそも小値賀牛は高麗牛と小値賀の地牛の交雑で、その特色として、体は小型、性格は従順で温和、風雨や疾病に強いと記載されています。また、正直牛とも称され、従順にて労働に堪え、役牛として重宝されていました。ほとんど農家が役牛として数頭の牛を飼い、朝夕牛を眺め、牛の健康状況を確認するなど、家族同様に可愛がって飼育してきたようです。また、毎日、朝夕青草のある所へ牛を移動させるなどもしていました。このような牛を大切にすることは、現在でも牛飼いの良き伝統として継承されるばかりでなく、牛の塔祭としても感謝の心が現れています。また、福岡県糸島、粕屋、宗像等からも農耕に供用している牛馬の中で、強靱で従順な特色を持つ小値賀牛が最適であると、取引が古くから行われていました。役牛から肉用牛と飼養目的が変わった現在も、その取引は継続されています。

昭和30、40年代に農耕の主体が耕運機などの動力に変わる中、小値賀の畜産も役牛本位から肉用牛へと経済面の牛飼いに移っていきます。これまでの役牛としての最良なポイントが小形では肉量が少ない、後半身の発育が貧弱など、肉用牛として大きな欠点となり、経済面でも大きな負担となっていきました。幸いなことに、長年地元産雌牛を主体に改良と増殖が進められていたため、雌方の系統、体型等は斉一性があり、小値賀牛の特色を生かした改良方法が熱心に検討されました。最も重要なことは改良への農家の自覚が必要でもありました。その当時の授精は、直接交配で、中村の種畜場ができるまでは、各地区で種雄牛（こってん牛）を飼っていました。唐見崎の人からは、中村の種畜場まで雌牛を引いて一日がかりで受精させていて、大変だったと聞きました。離島はというと、それぞれの島でも種牛を飼育して受精させていたそうです。種雄牛（こってん牛）は大きく怖かったことを思い出します。その後、人工授精技術が進展する中、昭和43年には種雄牛の繋養を止めて、長崎県種畜場からの精液の供給が始まりました。このことが小値賀牛の改良を大きく前進させ、経営面に大きく貢献することになりますが、その当時は人工授精技術問題もあり、直接交配を望む声もあったそうです。

紙面が尽きたので、次号に続きます！お楽しみに～！

（文：尾崎孝三）



柳地区の牛を使った代かき 郷土史から



番岳放牧場から納島を望む